

『今月の天候と農作業』

通巻第5543号

5月号

平成24年5月11日発行

宮崎県

宮崎地方気象台



【九州南部1か月予報】

向こう1か月の気温、降水量及び日照時間の各階級の予想される確率は次の通りです。

【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	20	30	50
降水量	九州南部	30	40	30
日照時間	九州南部	30	40	30

【概要】

九州南部では、前半は天気は数日の周期で変わり、後半は平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、高い確率50%です。

〈1週目の予報〉 5月12日(土)～5月18日(金)

天気は、期間のはじめは高気圧に覆われて晴れますが、その後は気圧の谷や湿った気流の影響で雲が広がりやすく、期間の中頃に雨の降る日があるでしょう。

(詳しくは週間天気予報をご利用ください。)

気温は、九州南部で高い確率50%です。

〈2週目の予報〉 5月19日(土)～5月25日(金)

天気は、九州南部では数日の周期で変わるでしょう。奄美地方では低気圧や前線の影響を受けやすく、平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

気温は、九州南部で高い確率50%、奄美地方で平年並または高い確率ともに40%です。

〈3週目から4週目の予報〉 5月26日(土)～6月8日(金)

天気は、低気圧や前線の影響を受けやすく、平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

普通作物

◆早期水稻

田植え後、強風や低温の被害が一部ありましたが、全体的には順調に生育しています。

今後、いもち病防除など、早めの適期管理に心掛けましょう。

1 水管理

分けつが株当たり20本以上になったら、「中干し」を行います。落水は5～7日で、軽く足跡が付く程度とします。中干し後は走り水を行った後、間断かん水に努めます。中干し前に溝切りを行うと、水管理が容易にできます。

2 病虫害対策

気温が上がると、葉色の濃い水田や冷水田ではいもち病が発生しやすくなります。田植え時に箱施葉剤を施用していない場合は、特に注意が必要で、発生を確認したら早めに防除します。

3 穂肥

5月下旬から6月上旬にかけて穂肥時期となります。コシヒカリは倒伏しやすいので、幼穂長が一センチになったのを確認し、葉色を考慮して施肥を行います。

◆普通期水稻

1 田植えの時期と準備

標高が高く冷涼な地域を除き、「ヒノヒカリ」を早植すると出穂期も早まり、高温障害による白未熟粒で、品質が低下しやすくなっています。このため地域の基準をもとに、6月20日以降の田植えとなるよう、育苗作業を行います。

倒伏や高温登熟障害に強い新品種「おてんとそだち」は、ヒノヒカリより出穂・成熟がやや早い品種です。収穫作業を考慮して田植をしましょう。

晩生種の「まいひかり」は、生育期間が長いため「ヒノヒカリ」より10日程早く田植えするようにします。

2 種子消毒と浸種

塩水選後、「シンガレセンチュウ」や「馬鹿苗病」等防除のため種子消毒を行います。

浸種は「ヒノヒカリ」は休眠が深いため、十分行わないと出芽が不揃いになります。水温15℃の時は、7日程浸種を行い、催芽を確認して播種します。

3 播種後の管理

昨年は苗いもちが一部で発生しました。出芽及び緑化期は、特に高温多湿になりやすいので、温度や換気に注意します。

4 防除

西北山間地域では5月上旬から田植えが始まりますが、「いもち病」等の防除のため箱施薬剤を施用します。

5 除草剤

除草剤の使用については、ラベルの記載内容を守り適正に使用します。

特に田植前に散布する場合、「植代時から移植4日前まで」の使用期間が、本年から「植代時から移植7日前まで」となりましたので注意して下さい。

◆ 麦類

収穫期を迎えますが、粒のツメ跡が僅かにつき、「ろう」位の固さに達した穂が8割を占めた頃を目安とします。

(鎌田 博人)

施設野菜

◆ 収穫後半のハウス内の管理

促成・半促成栽培のきゅうり、ピーマン等の果菜類は収穫後期となりますが、気温の上昇とともに、ハウス内の温度も高くなるため、かん水量を増やしていきます。しかし、それに併せてハウス内湿度が高くなるなど、ハウス内の環境が不良となり病害の発生にもつながりますので、整枝、摘葉等による残渣はハウス外に持出してハウス内を清潔にし、妻面サイドの開放などハウス内の温湿度を下げるための積極的な換気に努めましょう。収穫した果実は直射光線を避け、風通しの良い所に置き、早めに出荷するなど品質保持につ努めましょう。

◆収穫末期の害虫対策

栽培終了となるほ場においては、ウイルス媒介害虫であるスリップス類、コナジラミ類のハウス外への飛散を防止し、生息密度を下げるため、収穫終了後に10日以上ハウスの蒸し込みを行った後、残渣を持ち出すようにしましょう。

◆きゅうり

気温も高く、果実の肥大が促進されますので、収穫遅れののないよう適期収穫を行いましょう。また、果実肥大とともに葉からの蒸散量も多くなり、草勢低下や水分不足、ハウス内乾燥による先細り果や曲り果等が発生しやすくなるので、内張カーテンを利用した遮光やハウス内湿度の確保をおこない、かん水や追肥による草勢維持に努めましょう。かん水・追肥の目安として、かん水量は1株当たり2～3L/日程度で、追肥量は10a当たりチッソ成分で0.2kg/日程度とします。着果数が多く肥大の悪い場合は、葉面散布も効果的です。また、ハウス内の乾燥が激しい場合は、通路等への散水により適湿を保つなど生育環境の改善が必要となります。

◆ピーマン

茎葉が繁茂し、光線の透過不足等により白果の発生や赤果の発生が多くなります。また、成り疲れや着果の多いところでは樹への負担も大きく、うどんこ病が発生しやすくなりますので、適期収穫に心掛けるとともに、着果のない中枝や老化枝及び主枝上部の果実への光線を遮っている茎葉の整枝・せん定を行いましょう。また、直射光線による日焼け果や高温による尻腐れ果の発生も多くなりますので、日中の強光線時には内張カーテンにより光線の調節を行います。かん水施肥管理としては、ピーマンの根は乾燥に弱く、土壌水分が不足すると草勢が著しく低下しますので、こまめなかん水・追肥に心掛け、目安としてはきゅうりと同様の管理となります。

◆トマト類

前月の主枝摘心により果実肥大は進みますが、ハウス内の高温は乱形果や着色不良の原因となりますので、ハウス内の温度を下げるための換気の徹底に努めましょう。また、茎葉からの蒸散量も多くなり、かん水量も増やしていきませんが、一度に多量のかん水はハウス内の湿度を高め、裂果や灰色かび病の発生を助長しますので、少量多回数でのかん水を心掛けましょう。目安としては、1当たり1～1.5L/日程度のかん水量となります。

◆イチゴ

二次親株の採苗時期となりますが、炭そ病の発症が疑わしい株については、

直ちに廃棄することが蔓延を防ぐこととなりますので、親株は多目に準備しておくことが大切です。また、本ぼにおいてうどんこ病やハダニが発生している場合には、苗に伝搬する恐れがありますので、育苗床を優先した作業手順としましょう。

◆夏秋果菜類

中山間地域を中心に、雨よけトマト、露地きゅうり等の定植期となりますが、定植後の活着をスムーズ行うことが、その後の作柄に大きく影響してきますので、定植後1週間はこまめなかん水管理に心掛けましょう。

(郡司 孝幸)

葉茎根菜類・いも類

◆かんしょ

普通栽培の植え付け期です。スムーズに活着させるのが増収のこつですが、土壌が乾きすぎていたり、晴天日に植えると苗がしおれて活着が遅れます。適度な土壌水分で畦立てをおこない、曇天日に植えると活着が良くなります。また、苗は採苗してから数日乾燥しないように保管した苗（取り置き苗）の方が活着が早くなります。

◆スイートコーン

上旬にハウスやミニハウス栽培が、中旬より大型トンネル栽培の収穫期を迎えます。今年は低温や小雨の影響により、収穫期の遅れも予想されますが、アブラムシ、メイチュウ類の適期防除により商品性向上に努めましょう。また、収穫適期の幅が狭いことと品質低下（食味）も非常に早い品目ですので、早朝収穫の徹底と出荷調整時も品温を上げないよう品質保持に努めましょう。

◆にら

促成栽培の定植期です。たい肥は完熟したものを使います。火山灰土壌の畑では、定床を軽く鎮圧すると白絹病の発生が少なくなります。また、ネダニの発生が多い圃場では、前作の片付けの際に薬剤防除の徹底や残渣を持ち出した方が良い場合もありますので、発生の程度に応じた対策が必要です。

◆さといも

中晩生種の普通栽培で、5月に出る芽は、親芋の芽です。2本以上出ているものは、大きい芽を1本残して、ほかはかき取ります。6月以降に発生する芽は子芋の芽ですので、これは残します。また、圃場が乾燥すると生育が遅れるの

で積極的にかん水を行い、生育を促します。

◆らっきょう

下旬から本格的な収穫期に入ります。降雨後、土壤水分が多いときに収穫すると、腐敗の原因になりますので、晴天が続くときに収穫しましょう。また、ウイルスに感染した株を種球として残さないように注意しましょう。ウイルスに感染した株は、ひとつひとつの球が小さいことと、球がぴったりとくっつき合っ、分けにくいことで区別できます。

◆たまねぎ

収穫後半に当たります。収穫作業は天気予報に気をつけ、屋内に持ち込むまで晴天が続く時に行いましょう。普通、引き抜いた株は一日圃場に置いて乾かし、翌日に屋内で葉や根を切って姿を整えます。選果場に持ち込むときは、さらにその翌日になります。

◆アスパラガス

ハウス半促成栽培の収穫期にあたりますが、上旬までには立茎してくるタバコ大のものを1株当たり5～6本残して成茎とします。収穫量が多くなるため、かん水と追肥により樹勢の維持に努めましょう。

(河野 健次郎)

果樹

1 常緑果樹

◆かんきつ全般

今年は、去年の結果不良の影響で、着花数が多いことが予想されます。また、低温の影響により発芽が平年よりも遅れましたが、その後の気温はやや高めに推移しました。そのため、発芽から開花までの期間が短くなり、花の充実不足に伴う生理落果が懸念されます。摘果剤の使用は、生理落果の状況を見ながら慎重に行いましょう。

極早生温州の火山灰土壌でのマルチ栽培では、5月中～下旬がマルチ被覆の時期になります。園地周りから雨水が浸入せず、水はけの良い設置条件を確保し、過乾燥や減酸対策として、かん水施設を設置しましょう。

黒点病の発生源となるせん定枝や枯れ枝は、速やかに処

分しましょう。

かんきつ類に被害を及ぼすゴマダラカミキリに寄生するカビを利用した、効果の高い防除資材が開発されています。設置適期が5月下旬から6月上旬です。普及センターやJAに相談してみてください。

◆完熟きんかん

結果枝の充実促進のために、窒素主体の葉面散布やたっぷりのかん水を行い、大きな葉をつけることで結果枝の充実促進を図りましょう。

また、5月下旬に発根促進剤を施用することで一番果の結果安定につながる事がわかってきました。具体的な方法について、普及センターやJAに相談してみてください。

◆マンゴー

5月から6月にかけては、本県産マンゴーの出荷最盛期です。施設内の湿度を下げるのがヤニ果や病害果の発生防止に有効です。ビニルの開閉により、適切な湿度で管理しましょう。

また、巻上げ機の故障等による高温障害がこの時期によく発生しています。ハウスの見回りや機械の点検に気を配りましょう。

収穫が終わった施設では、たっぷりとかん水を行い、樹勢回復を図りましょう。

2 果樹園全般

草刈りは、樹と草による養分競合を防ぐとともに園内の害虫の密度を低くする効果があります。敷き草も雨による土壌の流亡や夏の高温・乾燥を和らげ、表層の細根を保護します。草刈りとその後の敷き草を実施しましょう。

(山口和典)

花き

電照栽培を行っている品目については、ここ数年、電球型蛍光灯への切り替えが進んでいます。蛍光灯の種類によっては、特定の波長が多く含まれるものもあり、光が施設外に漏れると隣接ほ場の作物に影響が出ることが予想されますので、遮光等の対策を行って下さい。

◆夏秋ギク

育苗・定植・摘心・側芽の整理作業や消灯・再電照等の管理については、それぞれの作型に応じて計画的に行ないましょう。「フローラル優香」は系統によって節間の詰まり具合が異なることから、導入している系統に適したジベレリンの散布回数・濃度等を確認し、散布を実施して下さい。

◆秋ギク

採穂用親株の挿し芽は、作型と穂冷蔵の有無でスタート時期が異なりますので、所要日数を計算して計画的に作業を進めて下さい。揃った穂を余裕を持って確保できるように親株床の面積は十分確保しましょう。キクの腋芽は高温で消失しやすくなりますので、腋芽の伸びにくい品種・系統は親株床をできるだけ涼しくし、必要に応じてBA剤を散布するなど腋芽の消失を防ぎましょう。

◆スイートピー

莢の色が緑色から黄色に変わってきたら採種をおこないます。収穫した莢は風通しの良い日陰で乾燥させ、種子を取りだした後、選別を実施し殺菌剤で消毒後、冷暗所で貯蔵します。日光が直接当たる場所で乾燥させると、発芽率が低下する危険性がありますので注意しましょう。採種が終了した場合は残渣を速やかに搬出し、十分に腐熟させ、土壌消毒を実施しましょう。

◆トルコギキョウ・デルフィニウム

継続的に収穫が続きますが、日中の気温が高くなると花首や花穂が徒長して軟弱になったり草姿が乱れるので、遮光やハウス換気を徹底して出来る限り昼温を下げるのが重要です。中山間地域では段階的に播種が行われますが、発芽率を高めるために気温とかん水管理を適切に行いましょう。

◆ホオズキ

次々に開花して結実しながら伸長を続ける時期になります。間引き・葉かきを行い良品生産に努めましょう。極端な低温や高温では、花粉の発芽不良により実の着きが悪くなるので温度管理に注意します。6月の着色期は防除期間が限られるため、ダニ、アザミウマ、アブラムシ類、うどんこ病等の病害虫防除は5月に定期的に行うことが重要です。マルハナバチの巣箱は日陰を作るなど、涼しい場所に置いて下さい。

◆シキミ

春芽の伸長から硬化時期になります。特に黒シミ斑点病ならびにサビダニ類はこの時期の防除が重要ですので、確実に実施しましょう。

畜産

◆家畜

5月は家畜にとって快適な季節となります。冬場の防寒対策で設置したカーテンや風よけの板等は取り除き、畜舎内の通風を確保しましょう。また梅雨に入る前に各種病原菌の畜舎内への侵入、増殖を抑え、衛生対策を徹底するために次の項目を確認してください。

1 踏み込み消毒槽の設置と薬液のこまめな交換

薬液はできれば3日～4日で交換し、汚れていれば即交換しましょう。長靴等を十分に水洗した後に消毒槽に入ると消毒効果が上がります。

2 畜舎内外の消毒の徹底と定期的な清掃

粉末の消石灰は水分が加わることで強アルカリ性になり消毒効果が上がりません。

3 農場内への外来者の入場制限

「衛生管理区域」に立ち入らせないための看板等を設置しましょう。

4 敷料のこまめな交換

特に子畜房の敷料は常時、乾燥した清潔なものになるよう心掛けましょう。この他にもカビ等の発生を防ぐために、飼料タンクの破損等の修繕や湿度が低く風通しの良い場所での飼料の保管に心掛けるなど、本格的な梅雨に入る前に注意が必要です。

◆飼料作物

今月は飼料作物のソルガムの播種適期です。イタリアンライグラスの後に播種する場合は残根が多く、また除草剤の効果を高めるために碎土・整地・播種後の鎮圧も充分に行いましょう。

例年、5月から6月にかけて農作業事故の発生が多く見られる時期です。ほ場での農業機械等の操作はもとより、乗用トラクターでの自宅と、ほ場の往復時にも運転には細心の注意を払い転倒事故等を防ぎましょう。

特用作物

◆茶

1 摘採と整枝

一番茶の摘採期は、平年並み～やや遅れていることから、中生種と晩生種との生育差がなく、摘採期の集中が予想されます。摘採位置の調整や摘み遅れ等に注意し、欠陥のない良質茶の生産に努めましょう。

摘採の7～10日後頃を目途に整枝を実施し、二番茶の芽揃いを良くしましょう。

2 茶園の更新

樹高が高く、枝条が細くなった茶園は更新が必要です。中切りは、一番茶直後が望ましく、中切り位置は高さ40～50センチ、枝幹の太さ4～5ミリの位置を目安に実施します。また、低温被害等の影響で新芽の揃いが悪い園では、浅刈りや深刈り更新等で良質茶生産に努めて下さい。

3 病虫害防除と施肥

クワシロカイガラムシの防除を行う場合は、幼虫の初発を確認して2週間後頃が防除適期となりますので、ふ化状況を見ながら、掛けむらのないように丁寧に薬剤を散布しましょう。特に、雄繭が目立ち枝枯れが見られる茶園では、中切りと組み合わせて防除を実施して下さい。

また、チャノキイロアザミウマやチャノミドリヒメヨコバイ等の害虫や病害に対する防除は、二番茶萌芽～開葉期に地区基準に準じて実施します。

施肥は、一番茶摘採前後に速効性の化成肥料を施用して下さい。

(佐藤邦彦)

◆しいたけ

1 選別

乾しいたけは、規格表を参考に選別し、商品価値を高めて販売します。

特に3㍍以下のものや規格外品は、絶対に混ぜないように必ず十分な選別を行いましょ。

保管は、湿気や害虫を防止するため、専用箱を用いて十分に密封し、湿度の低い冷暗所に保管します。

2 本伏せ

今の時期は、急な温度上昇が考えられますので、ほだ木の温度・湿度の管理に注意が必要です。仮伏せ中のほだ木は、しいたけ菌の活着が確認でき次第、排水や風通しのよい場所に組み替えます。

裸地伏せでは、直射日光による高温や乾燥を防ぐため、笠木を厚さ30㍍以

上施します。

林内伏せでは、下刈や整理伐により風通しを良くし、庇陰が不足する場合は笠木等で補います。

3 ほだ場管理

梅雨入り前に、防風ネット等の除去を行うとともに、ほだ場とその周辺の雑木雑草を刈り払うなどして、風通しを良くします。また、倒れたほた木等の整理を行い、病害菌の発生に注意します。

(小田 三保)

◆ 葉たばこ

今月は、わき芽取り、心止、収穫、乾燥等多くの作業が重なりますので、計画的に作業を行いましょ。

- 1 中葉下位着位（旧下葉）は取り遅れがない様、心止までに収穫し、それ以降の着位は、適熟葉収穫に努めましょ。
- 2 わき芽抑制剤は、わき芽の大きさと天候に注意し、使用方法を守って散布ましょ。また、農薬を使用した際には、野帳・使用実績票へ記入ましょ。
- 3 心止は、地力や樹勢を考慮して時期、深さを調整し、行いましょ。心止後の花軸部やわき芽は放置すると、それらが病害の発生源となるため、必ずほ地外に持ち出し、適切に処理ましょ。
- 4 えき病、たばこ黄斑えそ病防除対策として、排水溝の完備を中心に、効果的な農薬防除による対策に努めましょ。
- 5 異物混入防止のため、ほ地のマルチ片の回収を行い、収穫の際には、マルチ片の混入に注意ましょ。
- 6 異臭・虫害防止のため、乾燥前に乾燥室の点検と空焚きを行い、作業場・貯蔵庫の清掃を行いましょ。

(井 上 馨)

内容の詳細について

5月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県営農支援課及び森林経営課、宮崎たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病虫害の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

なになに農業アラカルト

鳥獣被害対策支援センターが設置されました。

1 はじめに

宮崎県では、野生鳥獣による農林作物等の被害額が約3億円程度で推移しています。

これらの直接的な被害額はもちろん、農家・林家の生産意欲の減退や、作付けの断念などへの影響を含め深刻な問題となっており、早急な対策を行う必要がありました。

このため、県では、鳥獣を寄せつけない「地域力の向上」をスローガンに、平成22年度より「鳥獣被害対策緊急プロジェクト」に取り組むこととし、「新たな視点」に立った鳥獣被害対策の推進を図っています。

緊急プロジェクトの推進体制として、副知事をトップとする「鳥獣被害対策特命チーム」、西臼杵支庁長・各農林振興局長をトップとする「地域鳥獣被害対策特命チーム」を設置しています。

2 「新たな視点」に立った鳥獣被害対策とは

野生鳥獣が「この集落に来ると“必ず満腹になれる”、人や車は“そんなに怖くない ” 」と学習してしまう無自覚の「餌付け」を止め、徹底的に追い払いを行うとともに、不足する冬場のエサを制限することにより、適正な生息頭数に導く、地域一体となった鳥獣被害対策です。

3 鳥獣被害対策支援センターの設置と役割

鳥獣被害対策緊急プロジェクトの推進に当たって、よりきめ細やかで効果的な被害対策を技術面で支援するため、このたび、宮崎県林業技術センター内に鳥獣被害対策支援センターが設置されました。

鳥獣被害対策支援センターでは、以下の3つの取り組みを柱として、各地域での取り組みに対して技術的な面で支援を行っていきます。

① 被害対策に向けた技術的支援

特命チームとの連携・技術指導
情報の受発信

② 人材の育成

林業普及指導員及び農業普及指導員の育成
鳥獣被害対策マイスターの育成

③ 新たな技術開発

モデル集落の設置支援
実証展示ほ場の設置支援

被害防止技術の研究・開発

4 最後に

鳥獣被害対策は、「餌となる残飯や取り残した作物などを放置しない、みんなが追いかう」など住民一人ひとりの心がけと、集落が一体となった取り組みが最も重要となります。

鳥獣被害対策支援センターは、そうした地域の取り組みを積極的に支援していきたいと考えておりますので、皆様方の御理解と御協力をお願いします。

(宮崎県林業技術センター)

向こう 1 か月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策 (5月)

作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
早期水稻	葉いもち	並	イネミズゾウムシの成虫が10株当たり5頭以上のほ場、スクミリンゴガイの生息数が多いほ場では粒剤の水面施用を行います。施用に当っては水管理に十分留意し、水深が3 cm程度になるように調整し、少なくとも4日間(薬剤によっては7日間)はかけ流しや落水はしないよう注意します。
	イネミズゾウムシ スクミリンゴガイ	やや少 並	
野菜・ 工芸作物	アブラムシ類 ハスモンヨトウ	並 並	両害虫とも平年並の発生ですが、アブラムシは各種ウイルス病を媒介しますので、早期発見に努め、早めに防除します。
冬春きゅうり	べと病 うどんこ病 褐斑病	並 並 並	うどんこ病は乾燥条件下で発生しやすいので、適正な温度・水管理に努めます。 ミナミキイロアザミウマによって媒介される黄化えそ病が、一部の地域で問題となっています。ミナミキイロアザミウマは、施設内では卵・幼虫・蛹・成虫が混在し、卵と蛹には薬剤がかかりにくいので、7日間隔で少なくとも3回の連続した防除を行います。
	ミナミキイロアザミウマ 黄化えそ病 (MY SV)	やや多 —	
冬春ピーマン	うどんこ病 斑点病	並 やや多	いずれの病害も発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、予防・初期防除に重点をおきます。罹病した茎葉等は感染源となるので、適宜除去し園外に持ち出します。 アザミウマ類は、気温の上昇とともにさらに増殖しやすくなるので、初期防除に努め中～多発ほ場では7日間隔で少なくとも3回の連続した防除を行います。
	アザミウマ類	並	
冬春トマト	灰色かび病 葉かび病	やや多 やや少	灰色かび病の発生がやや多い状況です。罹病した茎葉は適宜除去し園外に持ち出すとともに、多発ほ場では治療効果のある薬剤で防除します。 栽培終了時は、黄化葉巻病を媒介するタバココナジラミ類の拡散を防止するため、蒸し込み等により本虫を死滅させた後に残さを処分します。また、ほ場周辺の雑草・野良生えトマトは、病原ウイルスの感染源や本虫の増殖源となるので除草を徹底します。
	タバココナジラミ類 黄化葉巻病 (TYLCV)	やや多 前年、前々 年と同程度	
果樹全般	果樹カメムシ類	—	ウメやモモなどの結実中の果樹類では、飛来に注意し初期防除を徹底します。
カンキツ (露地栽培)	そうか病 かいよう病 灰色かび病	並 並 —	そうか病、かいよう病に罹病している枝葉は、感染源となるため徹底的に除去します。 灰色かび病の防除適期は落弁期です。また開花期から落弁期にかけての降雨は、本病の発生に好条件となるので注意が必要です。 ミカンハダニは、要防除水準(寄生葉率30%あるいは10葉当り寄生虫数5~10頭)に達したら速やかに防除します。
	ミカンハダニ	並	
茶	炭疽病	やや多	炭疽病の発生がやや多い状況です。一番茶摘採後の基幹防除を徹底します。 カンザワハダニ、チャノキイロアザミウマは、多発してからでは防除が困難になるので、早期発見・早期防除に努めます。 クワシロカイガラムシの薬剤散布量は、成園で10 a 当たり1,000 リットルを目安に、枝幹に十分かかるように丁寧に行います。また、激発園で、ふ化最盛期が一番茶後になる場合は、中切り更新して防除すると有効です。
	カンザワハダニ ハマキ類	並 並	
	チャノキイロアザミウマ	並	
	ツマグロオオカシメ	やや少	
	クワシロカイガラムシ	並 並	

- 1) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。
2) 病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、<http://www.jpnp.ne.jp/miyazaki> です。